

阿波の名医 ～ 山内半作 ～

青藍会広報 板 東 浩

いま、医学界では、移植技術が発展し、今後の幅広い適用が注目されている。今回の阿波の名医は、日本で最初に臓器移植の実験を行った医師・山内半作である（図1）。明治43(1910)年、「日本外科学会雑誌」には、総会演説



図1

「臓器移植：余ハ犬及ビ猫ニ於テ七回腎臓ヲ移植セリ・・・」の論文である。これが本邦初の自家腎移植の実験報告となり、非常に意義深い。日本移植学会の創立二十五周年記念総会において、山内は特別表彰の榮譽に輝いた（図2）。



図2

阿波藩の藩医をつとめた山内家は代々の医家だった。初代道丹，二代道丹（師張），三代弘達，その次女・千代の養子が山内谷五郎，四女・チマ（千満）の養子が山内半作である。谷五郎(1874-1939)は名西郡神山町に生まれ，一高，東京帝大医科大学を卒業し，明治36年に大道4丁目に山内病院を開設し，昭和14年病没まで存続した。

一方，半作は，明治12(1879)年，徳島市鷹匠町で，泉 茂次郎の子として生まれた。徳島中学，三高，へ進み，明治40(1907)年に京都帝国大学京都医科大学を卒業。外科学を専攻し，42年に助教授に，43年に岡山医学専門学校教授に就任した。

明治43年，自家腎移植の実験的研究結果を発表し，また，血管の移植・縫合について，世界に先駆けて実験的研究を実施。「輪状血管縫合及び動静脈縫合並びに血管移植に就いて」(ドイツ文) 学位請求論文を提出して医学博士の学位を授与された。活動の概要を表1に示す。

表1 山内半作の岡山における活動概要

明43. 7	京都帝国大学京都医科大学助教授 従七位山内半作 任岡山医学専門学校教授、叙高等官七等、七等俸下賜
明44. 2	第22回岡山医学会総会において「胸郭形成術」を発表
明44. 9	第3回眼科研究会で、「全身麻酔法について」来賓演説。
明45. 2	第23回岡山医学会総会「動脈瘤における理想的手術の一例」発表
明45. 5	岡山医学会通常会で「所謂回腸盲腸重積症について」発表
大 1. 8	文部省にて学位授与式を挙、文相、次官等列席
大 1. 9	学位記及び論文要旨「輪状血管縫合及び動静脈吻合並びに血管移植に就いて」(独文)
大 1.12	岡山医学会通常会で「突発脱疽の外科的療法について」発表
大 2. 2	岡山医学会「結腸周囲炎について」発表
大 3. 1	叙高等官五等
大 3. 5	日赤秋田支部病院長に栄転、岡山医学専門学友会の送別会で岡山医学専門学友会に対して金二百円を寄付

その後、大正3(1914)年、新設の日赤秋田支部病院の院長へ招聘。当時、秋田には医学博士は数人で、外科医は少なく、重傷の外科患者は仙台か東京へ行かねばならない状況だった。山内氏は外科の神様と謳われ、県内外から患者が集まることに。整形外科や皮膚科、性病泌尿器科なども含まれ、病室は満員で、増築してもまだベッドが不足していたという。

秋田における仕事ぶりが伝わっている。学問も臨床も最高で院内外の尊敬を集め、自然と院内は治まり、業務は円滑に進んだ。社会的にも地元の名士で花柳会での人気も抜群。先生のお人柄は、常に泰然、春風駘蕩であったときく。

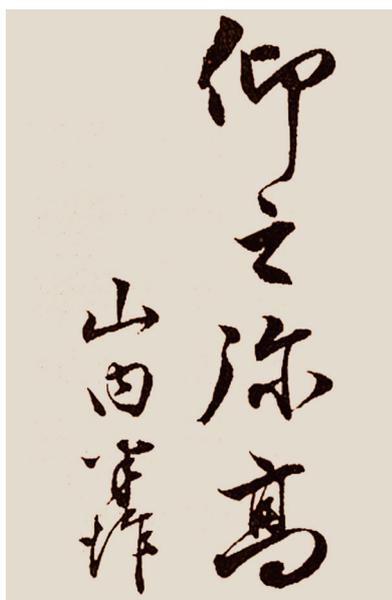


図3

大正六(1917)年から二年間赤十字の派遣で欧米に留学し、米国ではマサチューセッツ総合病院(MGH)、ドイツではライプチヒ大学で学ぶことに。帰朝後には、秋田市医学会や篤志看護婦人会などで欧米視察の講演を行った。秋田日赤ではその後も副院長や医長が洋行し、同病院の『秋大院友』(第15号, 1959)は、「山内院長追悼記」と題する特集を掲載し、中には自筆の頁も含まれる(図3)。

大正11(1922)年大阪回生病院へ異動し、昭和6(1931)年、52歳のとき大阪市西区で開業した。昭和20(1945)年、戦災のために

豊中に移転し、戦後は開業を息子にまかせて自適の生活に。昭和31(1956)年、入浴中に脳卒中で倒れ、わずか一時間足

らずで死去。息子によると、何ら苦痛なく好きな囲碁入浴を楽しみ、自ら体を清め誰にも迷惑をかけることなき全くの大往生だったようだ。享年七十七歳であった。氏は本邦の臓器移植の先覚者として、現代医療の基盤を作ったといえるだろう(図4)。

(徳島大学医学部同窓会青藍会会報第84号：X～Xページ，2014)



山内半作 (1879—1956)

図5

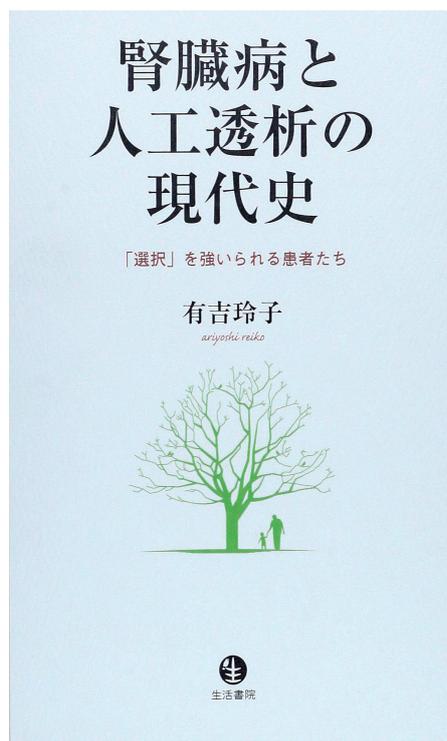


図4